

203 第二百三話 太平洋正面の防勢作戦破綻：総括

本メモランダムでも度々指摘したように、開戦劈頭の南方作戦後の戦略守勢態勢への転換が当初計画の如くに行われずに、日本は米軍の反攻に各個撃破を受けて遂には本土上陸をも危惧せざるを得ない状況に追い込まれた。（第三十二話 ミッドウェー作戦惨敗：戦争指導構想の混迷、第92話 戦略守勢態勢は当初から破綻—日本的悪弊！、第百十六話 不沈空母は画餅に帰した！参照）その要因を探ってみたい。各話に記載している部分をも含めて総括する。

1 広大な太平洋における作戦の在り方

随時あらゆる正面から進攻し得る敵部隊を防勢行動のみで阻止し得ないことは自明である。であるならば、十分に準備した要域において、我が海空部隊を集中して、敵進攻部隊を撃破して、その鋭鋒を挫き、主導権を握ることが肝要である。海軍が想定していた対米戦争計画はそうだった筈だ。だが、作戦に関しての情勢認識が、陸海軍或いは海軍内で共有されていたかと云うと必ずしもそうではない。

確かに軍事的に屈服出来ないのであれば、敵の準備未完に乗じて、連続攻撃を加えて敵進攻部隊を撃破するという案も考えられない訳ではないが、連続攻勢作戦一辺倒な作戦は独善的過ぎると云わねばなるまい。

2 態勢転換の遅れ

連続攻勢作戦に囚われて、当初計画を超えて戦面を拡大し、当初計画にないMI作戦、FS、AL島作戦等を敢行・計画したために、戦略守勢態勢への転換が遅れた。

一時的に敵との間合いを切って、態勢転換を行うことも必要だったと思えるが、時すでに遅しであった。邀撃帯構想への転換、絶対国防圏への転換やその他に、もう少し早い決断があったならばと思うような作戦が多い。ガ島然り、レイテ然り。

戦場の実態を日本はどの程度知り得ていたのか疑問である。

3 十分な反撃戦力の保持が出来なかった

無用な作戦により空母、空母搭載機を多数喪失したので、反撃戦力を拘置できなかった。また、航空戦果の過大評価がその一因でもあった。

4 陸軍戦力の太平洋正面の転用兵力僅少且つ輸送力不足もあり島嶼での準備不足

十分な陸軍戦力を配置して相応の準備を行えば、硫黄島やペリリュー島の例の如くに敵反攻部隊を阻止或いは遅らせることは可能だったはずだ。太平洋正面は海軍の戦域分担との陸軍の冷淡な対応もあり、残念である。また、陸軍の航空機と海軍航空機の運用上の問題もあった。

統合作戦の不備であり、陸海調整の不備でもある。

5 太平洋正面の戦況に関する楽観的認識

航空戦果の過大評価もあり、海軍側の強気な作戦構想や戦況推移見積等が微妙に楽観的な戦況予想となっていた感がある。

- * 順調な時には日本的な意思決定の問題は露呈しないが、厳しい局面になれば日本的な弱点が顕れる。大局から戦争指導しうる大局観が求められる。

（第二百三話 了）